
流星のロックマン4 ~ ?? mystery ~

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4

？？ mystery

【Zコード】

Z4615Z

【作者名】

nasubiboy

【あらすじ】

地球の危機を3度も救ったロックマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・WAXA調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは? 閻の組織の計画とは? すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける! 交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか?

記念すべき(?)なすびの一作品!-(流星シリーズ知っていること前提で書いてますんで宜しく)

プロローグ ～WAXA調査隊～（前書き）

始まりました
馱文ですんません
これから100話目指して頑張ります

プロローグ SWAXA調査隊

とある謎の地

「こつこつと、これは！あの大陸の遺跡？」

WAXA調査隊のリーダーは言つた。

「リーダーこつこれは大発見ですよ！すぐにWAXAへ連絡を」「ああ、勿論だ、二つは人類史に残る大発見だろう。二の大陸の

発見は人類の発展にとって・・・

とその時

「リブリバーリー」、その歴史と特徴

「・・・ポセイドン?・・・」

プロローグ ～WAXA調査隊～（後書き）

感想よろしく
・・・

中学校の準備（前書き）

やつとい、学校終わりました

中学校の準備

「こ」は「ダマタウン、ロックマン」と星河スバルが暮らしている。

「……」「……

『おーいスバル起きる……！ 今日はスピカモールに買い物だろ！』

叫んでいるのはウォーロック。FM星育ちのAM星人だ。

「うーん……っはーいま何時？」

『8時半。約束は9時だぞスバル』

「やばーい！ 委員長に怒られる！」

朝「はん、着替えを風のよひに済ませ、ギリギリのところでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それより、ゴン太よ！」

「この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとおり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行つてもやるつむららしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼つて」

「この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす

物知り。

「ははは、違いないね」

と、スバルが笑つてることで奥から走つてくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「「めん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう一」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ~。まずは教科書のプログラム取りにい~」

「えつ、まずは牛丼」お黙りゴン太！スバル君の言つとおりにしなさい~」

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅ショウガも）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長~お楽しみのあれですよ」

「やつだぜ！」のために朝牛丼食つてきたんだから」

「えっ？ なに？ なにがあるの？」

「まつまさか！ スバル君、ミンラちゃんのライブのチケット持つてない？」

「え~~~~~。今日ライブって聞いてないよー。キザマロ教えてよー

「スバルはライブなしだな。可哀そう。」

『ふつうのマイだなスバル』

「うわ~。ブロガーのへせにわされるなんて。スバル君」

そしてライブ一時間前、スバルだけ帰宅となつた・・・

「はあ~。ミンラちゃん怒つてるかな？ ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

とスバルは帰宅することになつた

中学校の準備（後書き）

長いか？まあいいでしょう

ライブ前・・・（前書き）

ふう、連投で あ、後ここら辺戦闘ないんで

ライブ前・・・

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん? だれだろ? ブラウズ!」

「す~ば~る~く~ん!~!~なんでライブ会場に~ないの~来てつ
て言つたよね!~」

この女の子はトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミン
ラ。電波変換でハープノートになる。

「~めん!~・~・~（忘れてたなんて言えないし、ビリしそ~あ、そ
うだ!~）チチチケットが売り切れて~てそ~・~・~」

「はあ~。スバルくん、忘れてたんでしょ~・~・~特等席用意して
るつてメールしたじやん」

「えつ、じゃあライブ見られるの~・~やつた~ 今すぐ行く

「今ビリ~るの~できれば楽屋に来てほしこんだけど

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ

「うん 早く来てね~」

というわけでスバルもライブを見れることとなつた。

そして樂屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよー。ライブ忘れてたくなー。」

「（まことに怒ってる）『めんーほんとに』」

「ふふつ、怒つてないよ 演技」

「え、怒つてないの。（よかつたー）」

『おー、ミソラ。お前がいるつーことは・・・』

『何よ人を悪党扱いしてー、ウォーロック』

『つげ、出たハープ』

ハープとは、FM星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと一時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし・・・）どうこう？」

「うーんと・・・とりあえずパフュ食べて、それから駄菓子屋に・・・

・

データ氣分の一人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであつた。

ライブ前・・・（後書き）

次はライブですね

ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないつて言ってたけど 次やる予定だったんでした
すんません

ライブ!

「みんな～！ 来てくれてありがとう！ 盛り上がりいくよ～」

「委員長始まりましたよー！」

「うお――!――始まつた!――!!」カラカラやへん――!」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいた

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわー。横から見ると違うねー
こんな近くで見られるなんて！」

「そ、うだな！ でも俺は見れないわ・・・」

「なんで口ツク？」

『いや・・・ハープが・・・』

『お呼びかしら? いくわよつ』

いやだー！助けてくれスバル！う、ウワーッ

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・

・
そんな時・・・

「ドガーン！――！」

「ばつ爆発？ロック行こう、っていいか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスポート003、シューティング・スター・ロックマン！」

ウーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕がなるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじやん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしひりなのはー。』

「じくよー・ロック」

『おうー。』

ライブ！（後書き）

次はジャミングガーリー戦 余裕です

ライブ再開（前書き）

ジャミンガーツ流星ーしか出てなかつた気が・・・

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、どうめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタツと笑ってテリーートされた・・・

「ふう、終わつたね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかつた・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立つたがつたか？ふつ』

「えつ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なこと・・・

「――――――――世界を救つたヒーローヒーロン!! さやかさんの
共演だ!!!!」

「うつーまざい、ロックビッグ!! ゆう!!」

『 しらねーな、 そんままで立つとけ』

「えー！僕、目立つの嫌いだつて・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がりしていく。

「みんなー！今日は世界を救つたヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよー」

ミソワロックマンにワインクした。

「（は）・・・一緒にって何すればいいの？）

「それじゃー行くよー シューティングスターー！」

「 「 「 「 「 」 」 」 」 」

「ウエーブロード 広い世界 夜空見上げ 一人ぼっち キズナ
探して ただ 徘徊う

ウソに怯え 逃げ続けて 孤独にさえ 気がつかずに ただ 歌
い続けていたの

星の光が 輝く 私の ノコロに 降り注ぐ そして あなたと
巡り合えたんだ

Our band was discovered then

震えて 泣いていた 私を 見つけてくれたね シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

その 笑顔に チカラ もらうんだ 怖いものなんか何もない
振り返らない ずっと 前を見て 光 掴む キミの 笑顔 そ
れが 私の ハートなんだよ

シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

会場は最高潮に盛り上がりつて幕を閉じたのであった・・・そして
ライブ終了後。

（委員長グループ）

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載つてない
ですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減つた」

「マロ辞典とやらに載つてゐるわけないじゃないの、あと、コン太、駄
菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「えへ、いかないのかよ~」

「いくわよ~!」

という感じで「コダマタウンへ帰つて行つた委員長グループだった。

ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

ライブ後

→スバル&ミソラ→

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ ックック、俺は田立てよかつたぜ』

「まあロックはやうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「スバルくん かつこよかつたよ」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだつたよ」

「んじや、僕かえ「ちょっと、このあと楽屋に来てくれない?」」

「あ、うん いいよ。んじや先行つてるね」

「うん すぐ行く (今日絶対言いつて決めてたんだから ファイ
トヨリソラ)」

『ふふつ、今日いじて云えるんでしょ ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ ミソラなう』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まつまたは、委員長のことが好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

告白・・・失敗・・・（前書き）

どんどん進めたいんだけどなー

告白・・・失敗・・・

（樂屋内）

「ミソラちゃん遅いなー なんか話あんのかなー」

スバルは広めの樂屋にポツンと一人でいた

「なんだろう？いつもより顔が赤かったような・・・」

『ふんっ、俺はわかつたぜ、名探偵の俺の推理では・・・ずばり！』

「ずばり？なに」

『ズバリ・・・あいつは・・・「ガチャー！」』

「はあはあ・・・スバル君待った？マス「//」とマネージャーに追わ
れてて」

「いや、大丈夫だよ、んぐなんの話？」

「あつあつだ、すつスバル君で・・・好きな人いる？・・・」

「いっいるよ（まさか・・・この展開は）」
「いっいるよ（まさか・・・この展開は）」

「あのさ、わたしスバル君のことが・・・「ガチャー！・・・//ソラ」
るか？」

マネージャーが駆け込んできた、そして

「おこ//ソラ、ダリマの撮影の時間だぞー！急いで準備しろー。」

「・・・（せいかくこと）（せいかくこと）」

「えいや、//ソラちゃん 僕は行くね（まさかなー//ソラちゃんが
僕のこと・・・）」

『いくか スバル』

と、雰囲気ぶち壊しで今回ま終わってしまったのだった。

告白・・・失敗・・・（後書き）

マネージャー出てきちゃつて台無しですわ

壁の壁紙 (牆紙)

冬休みに入る前に10話こえたい！

暁の呼び出し

あのあと、スバルは帰宅した。

そして春休みも終わり・・・入学式前日

「あ、暁さんからメールだ、なになに・・・」

「おう、久しぶりに送ったぞスバル、ちょっと明日来てくれないか
？学校には一週間休むってことで」

「え、なんだろ？学校休むまでってことは大事なことかな」

『まあ 行くしかねーだろ』

スバルはこのことを母に伝え許可をもらつて入学式から一週間休
むこととなつた

（謎の大陸）

「ポセイドン様、地球で何か動きが・・・」

「まったく、小賢しい・・・」

「先の探索隊と関係があるのでしょうか？」

「あるとしたら、ぶちのめすだけだ」

と言ひ残しポセイドンは奥の間へきえていった・・・

暁の呼び出し（後書き）

なぞですな

「・・・ポナベジン・・・」(漫畫丸)

なぞめこちます

「・・・ポセイドン・・・

『WAXA本部』

「「ひさしぶりだね」あの事件以来か・・・」

『おう、また事件が起きりや暴れられるぜ!』

「いや、平和な方が僕はいいんだけど・・・」

そして中に入る一人であった。

「暁さん!久しぶりです

「おひ、サクサクサク、ひき、サクサクしぶりだなサクサクサク」

「はい、けがは治ったのですか?」

「おひーーのとひー元氣だ」

つまい棒を食べ終わつた暁は答えた。

『あいつは元氣なのか?』

『久しぶりですねロック・・・ちゃん』

アシッドはヨイロー博士のよつてロックをからかう

『てめー ぶつ殺すぞ!』

ロックはやはり好戦的なのであつた。

「それで、暁ちゃんなんの用事で？」

「ああ、ちょっと司令室まで来てくれ」

司令室

「Eの音声を聞いてくれ・・・」

・ザザ～> <ザ～・・・アト・・・・ス・・・の・・・ポセイドン?・・・

「なんですかこれ？ポセイドン？」

「ああ、俺たちもわからん、IJの調査隊はWAXAつていつても独立してた調査隊だからな」

「独立してどうこう」とですか

「WAXAのなかで、何かを研究してた部隊らしいんだが・・・何をやつてたか上に報告してなかつたらしい」

「ボセイドン」という言葉しかわからない暁&スバルは調査を進

「でも、暁さんなんでぼくがこの調査に？」

「それは・・・ヒーローだから、じゃダメかな?」

『（暁のヤロー、何か隠してやがる）』

「まあ、いいですけど……」

そして、通信の発信源やら、調査隊の部屋を片っ端から調べたが・
・

「部屋からは何も出なかつたそつですよ、暁さん通信は？」

「サクサクサク、今ヨイロー博士が調査中だ」

「シドウちゃん、あ、それからスバルちゃんちよつときて

ヨイロー博士に呼ばれて行つてみると・・・

「「」の調査隊はね、通信の発信源をつかませないために鍵をかけて
るの」

「いつたいなんのために？」

「わからぬいけど・・・今からじやもつこの事件は迷宮入りつてこ
とね」

「サクサクサクそうですかサクサク」

この調査で一週間経つてしまったのでスバルは調査メンバーから
外れた

「シドウちゃん、スバルちゃんがまた地球を救つてくれるとい？」

「はい、彼は俺が認めたヒーローなんで……」

「あの大陸の力は強大だけど……スバルちゃんを巻き込むつもり？」

「彼の力がなければ……あの大陸とその裏で動いてる組織には勝てないと思つてますんで」

何か知つている一人はまた調査を始めた……

（闇の組織）

「……、次の計画へ移りつ……」これが私の計画の一歩だ

「ふふふつふ、俺は殺しができりやいいんだけどな」

「まあそいつな、まだお前は動かん。トート、ハイドとやらを呼んで計画をやらせろ」

「はつ、Z様了解です」

「おじブラック……いやZよ なぜそいつまでしてロックマンとやらを狙うんだ」

「この暗い部屋で光つてている画面にはスバルとミソラのデーターが……」

「ふつ、計画は100%の成功率に成るよつて邪魔者は消すもんだよ……」

「卑怯な手を使つてもか？」

「わざわざまつていろー。」

「ふーん、まあ俺には関係ないか・・・」

「そしてゾと呼ばれる男は闇へ消えた・・・」

「・・・ポセイドン・・・」（後書き）

闇の組織ってなんでしょう？
感想待つてま～す！

中学校初登校（前書き）

中学校に・・・

『クソ！起きやがれ！スーバールー！！！』

例のことく起きないスバルかと思ひきや・・・

『……………』

「おおでるなー、こつもロックがどうせひいて起こしてたのか調査してたんだけど」

最終手段は今□はなしが
・
・
・
・

最終手段にて何?まあしじゃ「餓食」によ

時刻は7時10分、意外と今日は早めなので余裕でご飯をたべて学校へ向かった

「委員長今田は来ないんだつた、これならもつと遅くに起きればよかつた・・・」

『うるせー！こっちの身になれ！まあいい、急げスバル』

学校

「おせむりの長、キナマロ」

「あらスバル君、久しづり。」

「スバル君、委員長はまた委員長になりましたよ」

「そうか・・・あれゴン太は?」

「おうスバル今来たぜ!」

と、一週間ぶりに委員長メンバーと話すスバルだった。そしてチヤイムが鳴りみんな座った

「あれ、僕の横つてだれ?」

「スバル君知らないんですか、この席は・・・「ガラララ」」

「お~い、みんな一席についてるか?」

とは言つてきたのはどこにでもいそうなふつーの先生(先生たちはストーリーにあまり出ません)

「お、あいつはまた遅刻かんじや出欠取るぞ、あ、その前にスバル自己紹介しろ」

「はつハイ」

前に出るスバル

「えーっと、星河スバルです。よろしくおねが「ガラガラガラ、バン!」

「すいませ～ん、遅れました あつ～すばるくん！」

と遅れてきたのはミソラだった、スバルは超びっくり&他のクラスメートは落ち着いている

「早く席につけ、まったくアイドルだからつていつも遅刻とは・・・

「

そしてスバルの自己紹介もおわり、席に着いた

「ミソラちゃんがこの学校なんて聞いてないよ、キーワード～～

「なつ、僕のせいですか。マロ辞典には前から載つてましたよ」

「ま、いいじゃないの二人とも。宜しくねスバル君」

クラスメートの何人かはなぜスバルがミソラと知り合いなのか分からず、他の生徒はスバルがロックマンだからだと知っていた

・・・そして帰りのホームルームが終わった

『帰らうぜスバル！』

「うん、ん？メールだ・・・ミソラちゃんからだ」

『放課後展望台に来て、この前伝えたかったこと書つから・・・』

スバルは顔が赤くなつた、とのミソラこと

「はい、ちょっと待つて、今サインするからはいはいおさない

生徒からのサイン要求でせじそうだった

「んじゅ、先に行くかロック

』おつー。

展望台へ向かったのだった・・・

中学校初登校（後書き）

王道を少しこじくつてみました（ふつうはミンラが転校生だったのです）

次は告白です 上手く書けるかな？

ついに十話にいたか

～展望台～

「//ソソサちゃん、まだかな～」

かれこれ1時間待っているスバル

『まあ、あいつもアイドルだしな』

「ロック、この前・・・ズバリーって言つてたナビ//ソソサちゃんの話つてなんのことかなー？」

『ああ、ズバリ・・・新発売のつまみ棒の話だ//』

ドヤ顔をするロックを引いた目で見るスバルはビクすれぱーーの
か分からなかつた

「そつそつなのかな？（まさか、//今までロックが鈍感とは）」

『おひ、なんなら俺を名探偵つて呼んでくれてもいいんだぜ』

『んじや、行きましょうか//探偵』

『つげ、ハープ！いやだ～』

わ～よ～な～らロックとばかりに手を振るスバルだった

告白のあと（後書き）

次じては告白、つてかロックばかりやれやん。

咲田（さきた）

やつとかへつかれたわ

→スバル視点→ 3時間後（待ち合わせ時間から4時間半）

口ツクがいなくなつてからすこしたつたが、ミソラはまだ来なかつた・・・

「ハープが来たからすぐ来ると思ったんだけどな・・・」

「うう、さむっ。ハツハクション……まだかな？」

すつかり暗くなり、夜空には星が輝きだした・・・

「母さんに遅くなるってメールしておいた・・・」

スバルはドギドギしながらソラを待っていた

シラ观点

全力でダッシュするミソラ、なんとあの後マネージャーに呼び出されて・・・

「スバル君怒ってるかな～・・・」のままじや・・・」

電波変換したいところだが、ハープにロックの面倒を任せたためで
きなかつた

「ぐすつ（スバル君に咲耶が来たっておどけていたんだ……）

「

涙をこぼしてやつと展望台へ着いた

「（あ、スバル君待つてくれてる）」

～通常視点（スバル視点）～

「あつー//ソラちゃんー」

「（じめんスバル君）んなじかんまで……（おじつ）……ない?」

「

「（ちゅうと意地悪してみるか……）遅いー..」

「（めあこ）「めん!咲耶」「めん……!」

「ふふふ、おじつによよ・んでな?」

「あつ、あのさスバル君、わつ私とさ・・・」待つてー!」?」

「（ちゅうと咲耶）めん!咲耶」「めん……!」

「（えつこ）

「//ソラちゃん!前から・・・前から好きでした・・・僕と、付き合つて下さー!」

「私こそ、好きでした・・・おじへお願いします

そう言つたミソラは涙田だつた、

「んじや、夜遅くだし帰ろうよ」

「ぐすり、うん・・・」

「（泣いてる？）明日また学校で逢おうね」

「ふふつ、明日は土曜日だよ。でもさ、うちじゃない？スバル君来た
ことないし・・・」

「ベイサイドシティーだつけ？」

「うん、スバル君の家に迎えに行くから んじやーね」

「うん」

家に帰る時一人は顔が真っ赤だつたとさ・・・

告白（後書き）

今日はここまで・・かな
感想まつてます！
次も書きたいんだけどな

//次の家に行く朝（前書き）

視点に入れ替わるのに注意

（スバルの家）

「・・・・・」

『 ～～～・・～～～・・・』

昨日からドキドキして眠れていなスバル、今は時刻4時

「ふう、寝れないしテレビでも見てるか・・・」

一階に降りると土曜日でも朝早く起きている大吾＆あかね

「あらスバル今日は早いのね」

「おう、スバル・・・スバルの顔も見れたし行くかー！それじゃあ、あかね」

「「いつてらつしゃーい」」

大吾はいつも4時出勤していたのをはじめて知ったスバルであった

「（いんないんだね父さん・・・）」

早めの朝はんを食べてふと思つたスバル。と、そこにあかねが

「んで、どうなの// 今のはんとは？」

「ブ～フ……（なんで……？）」

お茶を吹いてしまうスバル、面白そうにあかねは続ける

「あら、図星だった？」

「（ホントは知つてたくせん）」

顔を真つ赤にしてれるスバル、パンを口に詰め込み、逃げるよう部屋へ行つた

「ふふつ、スバルも大きくなつたわね。前はあんなに小さかつたのに」

嬉しそうなあかねだった

～ミソラキ～

「（ハープは寝てるみたい）・・・」

『起きてるわよミソラ、寝れなかつたんだしょ』

「うん・・・」

今は朝4時半、まだ約束の9時には遠い

「メールしてみるかな、起きたら返信してつて（早く来ればいいな）

」

そして朝早くにメールをして、飯を食べた

（スバルの家）

「あ、メールだ……なになに？」

「スバル君、起きたら返信してね～すぐ行くから」

「う～ん……（こましたら迷惑かな？）一応しつくか」

そして着替えなどを済ませていくスバルだった

（ミソラモ）

ミソラは朝「はん（シリアル）」を食べていた

「ん！スバル君今日早いんだね！早く行かなきや」

山のようなシリアルを一気に口に含んで、いつも服に着替えてスバルの家へ向かった

（スバルの家）

そして5時になった

「まだ5時ってテレビショッピングやってるんだね……」

テレビでは高圧洗浄機のマテリアルウェーブを紹介していた

『おい、これセットで15000ゼニ だつてよスバル！……買おうぜ』

いいカモのロックを冷たい声で返事をするスバル

「はあ、ロック高圧洗浄機つて何に使うのそれ……」「うなつでしょ」

『でも……あの値段で……』「ピンポン」「

「あ、ミンカラちゃん来たかな?」

ドアを開けると黒うなミンカラが今できる満面の笑みをした

「おはようスバル君 こいつか?」

「うん、幽かん行つてへるよー!」

「はーい、行つてひりしゃー!」

そしてベイサイドシティのリリの家に行くのであった

（謎の大陸）

「ポセイドン様、ムーの生き残りとやらが来ました」

「やうか……通せー!」

「しかし……」

奥から白い髪の少年が来た、

「ふん、貴様がポセイドンか。オリハル「ンせビ」だ」

「答える義理もないわい、用事はそれだけか」

「ああ、教えないなり」とど奪いに来る・・・

「ははははーおぬしじ」とせに奪えるかな?」

「ふんっ」

そして白い髪の少年は去っていった

「ポセイドン様なぜあの男を通したので?」

「・・・いや、やつは何か組織について知っているかと聞いたのじ
やが・・・」

～闇の組織～

「ハイドヒセヒラヒロシクマンの元へ向かわせと」

「N様・・・やつは弱いから勝てぬぞ・・・

「トート・・・ニセ?、やつはロシクマンのデーターを取つても

「ひい

「所詮は捨て駒つてか、ブリックよ」

「Yーじつの間に?、あいこ準備させておけ」

「「あれ？」

「（あてロックマンがいるかな）」

そしてまた闇に消えた・・・

// 今のはじめの朝（後書き）

次もすぐ書きたいな

明日から学校か・・・

～ベイサイドシティミソラ宅前～

「うわ～・・・でつかない」

ミソラの家は超高層ビルの一室だつた

「よし、入ろうスバル君」

ガードウイザードに暗証番号を確認してもらい中へ入つた

「ホテルみたい・・・（ミソラちゃんはやっぱトップアイドルなんだよな・・・）？」

「んじゃ、うちの部屋行こう」

～ミソラの部屋～

「・・・（ピンクぱつかだな～女の子の部屋ってこんな感じなのか？）」

ミソラの部屋はピンクを基調とした部屋だった、

「どうかな？」

「あ、うん（何で言えぱいいんだ？）」

返答に困つてこるスバル、とそこで

『ふふふつ、スバル君照れぢやつて』

「いっいや照れてないよ・・・」

顔を赤くするスバル

「飲み物持つてくるね～」

ミソラは飲み物を取りに行つた

『ケツ、俺は来る意味なかつたかもな』

「そう言わないでよロック、ほらハープもいるんだしや」

『スバル、俺は地獄に行きたくないぜ・・・（何か電波を感じる・・・）』

『それじゃあ、今日は天国にいきましょうか』

そんな感じ?でロックは連れて行かれたのであつた

「スバル君、飲み物持つてきたよ」

飲み物（紅茶）を飲みながら楽しそうに会話をする一人だった・・・

「ふふふつ、私の脚本が出来上がつたぞロックマン」

二人に危機が迫つてゐるとはまだ誰も知らなかつた・・・

リラモ（後書き）

ハイドが次出ます

ファンタマイザク現る（前書き）

ハイドリヒにですよ

ファンタマーラック現る

→ ロック&ハープ

『おい・・・どう思つこれ?』

『状況は最悪ね、早く一人に知らせなきや』

「人の周りには大量のウイルスがいた、軽く200匹は超えるだ
う」

『（Jの電波、ハイドじやないか?）おい、お前はおかしな電波を
感じないか?』

『うん、前に会つたことがあるよつな氣がするわ』

二人は急いでスバル&ミソラのもとへ向かった

→ スバル&ミソラ

「ところでなんでミソラちゃんは『ダマタウンの中学校来たの?』

「えつ!（スバル君がいるからだよ）いや、こっちの中学校は私立
だしさ・・・」

「へえ〜（まさか僕がいるからはないよな）」

そんな会話をしているときにロックたちが到着

『おい！スバル！ウイルスが大量発生してるぞ』

「え！分かつた行こう、トランスクード003、シューティング・スター・ロックマン」

「ハープ私たちも行こう トランスクード004 ハープ・ノート」

「ホテル玄関」

「いくよ、ハープ・ノート！ キヤノン プラズマガン」

両手を銃に変えどんどんメットリオを倒していく

「ハープ私たちも行くよ ショックノート」

二人は5分もしないうちに200匹ぐらいのウイルスを全滅にした、が・・・

『おいスバル、あいつだ！ハイドの野郎だ！』

「ふふふつ・・・ロックマンいいアドリブだ、しかしこの主役がお前を倒す」

「こい！ハイド！ソラちゃんさがつてて」

「うん（スバル君なら勝ってくれるよね）」

「行こうロック」

『おう 腕がなるぜ』

「ふふふ勝てるのかな？ロックマン・・・」

そしてハイド戦が幕を開ける中・・・

「ハイドのやつ、俺の命令を破りやがって・・・死刑判決だな」

闇の組織の幹部、Yというロープを被つた男は遠くでさうつぶやいた。彼の手には人形劇などで使う道具が握られていた・・・

ファンタマイラック現る（後書き）

Yはこのストーリーで重要ななんぞ忘れないで覚えておいてください

ファンタマイザク戦（前書き）

眠りつすな

ファンタムブラック戦

～ミシカのマンショングループ～

「バトルカード ロングソード…」

「フフフハハハ！ファンタムクロ…」

お互い一歩も譲らぬ二人、しかしブラックには余裕がなくギリギリといったところだ

「くそ…もう一回だファンタムクロ…！」

ブラックが仕掛けたがロックマンはすぐにかわす

「ヒドギリブレード！ ワイドソード…」

今度はロックマンから攻める、2刀流の連続攻撃だ

「くそ…」

流石にブラックも受け切れずくらつてしまつ

「まだだ…！」

しかし打たれずよく再び攻撃を仕掛けてくる

「ロックーらちが明かないけど、ノイズチョンジできないしじつする…」

『「」のまま続けりや、そのうちすきを突いて勝てるだろ』

「一つの影はまた衝突し、それを一人ポツンと見守るミソラ

「スバル君ならきっと勝てるよね

『負けるわけないじゃないの』

「わたしの・・・私の脚本は完璧だ・・・」

「僕だって負けるわけにはいかないんだ！バトルカード インパクトキヤノン！」

インパクトキヤノンを打たれたブラックは飛ばされ、二人の間に距離ができる

「私は負けない！！！ファンタムスラッシュ』

『来るぞスバル！』

「うん！これで最後だ！」

ズバッヒとファンタムスラッシュがロックマンを切つたと思いま
や・・・

「バトルカード ヘンゲノジュツ 終わりだハイド！――！」

「なにつーぐつ・・・」

ブラックは負けて「うずくまる、

「ミソリちゃん終わったよ・・・帰るわ」

「うさ」

一人が帰る「う」としての時ブラックは

「くそ・・・私の脚本は・・・かん・・・」

電波変換を解かれたハイドは、マンションのまえで倒れていた

「見苦しいなハイドよ」

ロープをはおり、十字架の仮面の男は言った

「なつ、マドーラ・・・様、なぜいこく」

「おい、俺の取つてこい」といつた品は・・・

「（まづ）忘れてた・・・くそつ）次は必ず取つて「バン！」

「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」

とこりとマドーラとこりの男はハイドの髪を一本ぬきとった

「ぐつ、何をする

「ふつ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のよつなものを巧みに動かしていく

「まつまさか、それは・・・」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のよつにぎこちなくミソラの部屋へ向かわされて行った・・・

「第一ラウンドだロックマンよ・・・」

ファンタムフラック戦（後書き）

マニアリ希じ・・・マニアラ= イです

人形劇の始まり始まり（前書き）

・・・（書くことない）・・・

人形劇の始まり始まり

「ミソラの部屋」

「玄関だいぶ壊しちやつたね・・・」

「大丈夫だよ、ロックマンは世界を救つたヒーローなんだから」

照れるスバル、しかしこの時この部屋いやビル自体が大変なことになるとは思つてもいなかつた

「スバル君いつ帰るの？暗くなつてきたけど・・・」

「えつ、早く帰つた方がいい？」

「え、うん、いやスバル君のお母さんも心配してゐかなつて（時間言わなきやよかつた・・・そつしたらスバル君ともつと一緒に入れたのに・・・）」

「大丈夫だよそこは、なんか母さん機嫌よくてメールにこんなこと書いてきたし」

「スバルへ もしよかつたら今日はミソラちゃんの家に泊まつてくれば？今日は結婚記念日だから、大吾さんと一人で食事に行くつもりだつたから それに付き合つてゐる人の時間を邪魔するわけにもいかないしね あかね」

「・・・（スバル君と二人きりの夜・・・うれしい）」

「あ、でも迷惑だよね・・・そのつまらぬ

「こついや、私も独り暮らしだとみじめに泊つて行つてもこよ・・・

「

「（うそだつ・母さんの冗談が現実に？）でも・・・

・・・顔を赤くする一人、いい雰囲気になつてきましたかへりやつは来る・

・・・

『（ん？ハイド？）おいスバルハイドの電波がする・・・

『全くあなたは空氣読めないの？（でも確かに・・・）』

その時！

「ガツシャーン・・・・

「スバル君後ろ！・

後ろを振り向くとガラスを割ったハイドが宙に浮いていた、しかし何かおかしい・・・

「ハイド！いや、ファンтомブラック勝負はついたはずだ！・

「ぐつ（クソ）のままでは死んでしまう）た・・すけて・・くれ

「えつ？なんで苦しそうなの、スバル君なんかした？

「いや、何もしてない・・・

ブラックはその時操られるようにして、苦しみながら攻撃してきた

「ロック！なんかおかしいけどやうつー。ロックバスター」

直撃だつた、普通ならここで倒れる、はずだが

「（ぐつ、まず）のままでは俺」と爆発するロックマン・・・
聞け、がふつ」

「なに？（おかしいぞ何か）」

が・・・
とブラックは身を覆つているマントをとつた、そこには時限爆弾

「……いつが……爆発する前に俺についてる……電波の糸を切れ……」

血を吹きながらブラックは言った

「ロック電波の糸つてなに?」

『うちの世界でいうピアノ線見て一なやつだ』

「どこを切ればいいの？」

『わかんねー よ俺は』

そんなやり取りをしてると时限爆弾爆発まで残り1分になる

『まざー・ミソラちゃん・』のマンションの人を全員避難させて

「スバル君は・・・」

「僕はこれを取り外す努力をしてみる、腐れ縁だけどこの人を見捨てれない・・・」

「スバル君・・・（何て優しい）・・・わかつた 頑張って、ムチャしないでね」

『ケツ、こんなやつをなんで救わねーといけないんだよ！』

「僕にも分んないけど・・・助けを求める人がいたら救うべきじゃないのかな」

「クツ、貸しが一つできたな・・・ロックマン・・・俺の、俺の頭上を切ってくれ」

「わかつた、ソード！　えい！」

電波の糸は簡単に切れた、しかしここで問題が発生する

『クソッ、この時限爆弾が取れない・・・』

『どうすんだスバル、残り30秒切つてるぞー』

「わかつて、・・・あつ、コードが一つある・・・これって

『よくあるパターンーどちらかを切る・・・赤と緑か・・・』

赤いコードと緑のコードを田の前に悩むスバル

「一か八か、僕は緑を切る！……ウオ バトルカード ソードフ
アイター！」

時間は残り3秒を切っていた・・・そして緑のコードを切った

「（頼む！…まだ死ねないんだ！…）」

『（ここ）でスバルを守れなかつたら大吾に呑わせる顔がない・・・』

』

「（気絶中）」

しかし運命とは無情なものである・・・

「ピー！爆破コード切斷確認、5秒後爆発します！」

「まづい！…どうしようロック？…いい人生だった

『バツキヤロウ！…スバル！…死ぬな！…』

「（気絶につき無言）」

とここでハイドから爆弾が外れた、おそらくコードを切つたから
だろう・・・

「ロック・・・ありがとう今まで・・・」

『スバル・・・』

人形劇の始まり始まり（後書き）

続く
…

爆発の傷跡（前書き）

早く寝たい・・・これ書いたら寝る

（ミソラ視点）

ビルのまえで祈っているミソラに最悪の光景が・・・

「ドカーン！……ガラガラ！……」

なんとこうすビルそのものが崩れ去ってしまった、スバルは爆心地の中心だったろう

「（スバル君ひどいよ・・・私一人残して死ぬなんて・・・）ぐす
つ・・・」

『ミソラ・・・（ロックも死んじゃったわね・・・）』

そんな時マンションの住民たちはひとつの方に向に指をして叫んだ

「「「「「ロックマンだ！……」「」「」「」「」

そこにはハイドを抱きかかえ帰つてくるヒーローの姿があった

「（スバル君！）ぐすつ、うつ・・・」

ミソラはその場にへたり込んだ、スバルにもしものことがあったらと思つたからだ

「スバル君！・・・ぐすつ」

降りてきたヒーローに抱きついたミンラ、

「約束は守るよミンラちゃん、絶対に！」

『しかしスバル、よくあんな状況で頭が回ったな・・・』

（回想（爆発の瞬間））

「ロックありがとう今まで・・・」

『えんぎでもねーこと言つたな』

「いや、最後まで聞いて・・・そしてこれからも宜しく！ バトルカードスープーバリア！」

『スバル・・・その手があつたか』

「うん・・・でも、僕はダメージを少しつぶさうよ」

『なんで？』

とロックが言つとスバルはバリアをハイドにかけ自分はガードした

『ムチャしやがる・・・』

（通常視点）

ロックがそのことを説明してるとスバルは電波変換が解け倒れてしまった、みると全身傷や火傷だらけだった

「スバル君！ 目を開けて！ お願ひ！（いやつ、こんなお別れ……）」

「

「大丈夫だよ……それよりハイドは？」

『消えた……さつきまでいたんだがどこかへ姿をくらましたな』

「そう……か……無事……だつたみ……たいだ……ね……」

「スバル君！……ぐすつ、いやだよこんなの……」

『早く起きやがれスバル！ おい！』

「ハープ！ 救急車を……いや電波変換よ、私が運ぶ！」

『わかったわ、ミソラー。』

そうしてミソラの家は全壊、だが何とかスバルは一命を取り留めたのであった……

「ふふふ、こうくなくなつちやね。次はどうよつかな？……響!!」

ソラ……彼女を使つか……

マリー「はなづかひまつまつ」と、ミソラの『真』を見てにたつべのであった

「この真じは必ず返すのが、私の新しい脚本かな……ぐつ

ハイドは、大けがをしながら闇に消えたのだった

爆発の傷跡（後書き）

ハイドはここからじぶんのところへ（）になるのかね？
マーダーは怖いっすねー
んじやまた明日更新予定です

感想待ってるよ￥（○○）-

奴は目覚めた・・・(前書き)

疲れた学校

奴は目覚めた・・・

「とある病院」

「…………」

『まだ起きねーのかスバル・・・』

あれから六日もたつていた、生きてはいるのだが目を覚まさないスバル

『つったく、ハイドなんて救う意味あったのか?』

「…………」

『はあ・・・返事もねーし・・・暇だな』

「学校」

今は昼休み、ミソラはとこいつと・・・

「ねえ、何か知ってるでしょ・・・スバル君のこと」

委員長が問い合わせるとミソラは聞こえないふりをする、しかし委員長はあきらめない

「六日も腹痛つておかしいじゃないの、それにあなたまで元気ないし」

「（ここは言つべきかな）スバル君は……けがしてるんだよ……
大けが……」

「何があつたんだよスバルに？」

「ゴン太も気になるようだ、

「ミソラちゃん……本当のことを話して下さいよ、スバル君のこ
と僕たちだって心配なんですから」

キザマロも言つてくれる

「大丈夫だよ……来週には来るつて……」

「（ミソラの田には光がない、これに感づかないほど委員長
は甘くない、が

「（スバル君のことだし、ムチャしただけよね）まあいいわ、行く
わよキザマロ、ゴン太」

「何とかしのいでいたミソラ、しかしスバルが田覚めないのは心配
だった

「（スバル君……大丈夫って言つたよね）……」

『（相当心配みたいね）大丈夫よミソラ』

「こんな時励ますのがハープの役目

「うん……帰りにまた病院行つてみるね」

なんとか元気を取り戻すミソラだった

（病院）

「…………（ん？）」はどうだ（ロック？）いる？』

『フンシ、ようやくお皿覚めか・・・』

「どれくらいいたつたの、あれから？」

『六日・・・心配してたぞ・・・ミソラが』

「ロックじゃないんだ！そこは心配してよー！」

急に元気になるロック＆スバルコンビ

「でも心配かけたな、メールしと」「・・・今何時？」

『ぞつと、一時だな・・・学校は毎休みの時間じゃねーか』

「それなら電話しよ！ ブラウズ』

（学校屋上）

「ふつーには気持ち一ね』

中学校にも屋上があり、小学校より大きく芝生が生えている

『ミソラ電話よ、誰かしら？』

「ん？えつ、スバル君？ ブラウズ！」

映ったスバルの顔は凄く久しぶりだった

「いのとソソリちゃん、心配かけて」

「ほんつりとー心配したんだから・・・もつムチャしないで・・・」

「

「うさ）//ソリちゃんを守るためにまたしちゃうな・・・」

「学校終わったらソリちゃんに行くから」

『ソリ、今日からソリアドの撮影上

「うーつ・・・」めんスバル君・・・

「いいよ、気にしないで」

「（なんて優しい）委員長たちは行くと想つから、私は今度ね」

「うん！んじや、頑張ってね」

（放課後・病院）

「スバル君、心配したじゃないの・・・何があったの？」

「おいスバル、何があったんだ？」

「スバル君、僕も心配してたんですよ・・・」

「みんな・・・（みんな心配してくれてたんだ・・・）」

そして、スバルはみんなに説明をして、そのあとは学校のことなどで話し込んだ

「そう言えばスバル君、来週は体育祭よ・・・あなたにも出番はあるからね」

「もうそんな時期か・・・」

そう言つたスバルに対し、三人はニヤニヤしている

「（なんだろ？）」

そんな時、

「ガチャー！ふう、スバル君ー来ちゃつた」

ミソラが駆け込んできた、そして「てへつ」とやつている

「うつ・・・（可愛い）」

「それじゃあみんな揃つたところで帰りましょーひ

5人は帰ることに、ちなみにスバルはもう傷が治り、退院できる状態だった

（帰宅時・「ダマタウン」）

「それじゃあ、みんな月曜日ね、遅刻しないでね」

「ゴン太君行きましょうか、スバル君、ミソラちゃんさようなら」

「ねへ、スバル、ニツカラやん、じゃあな」

「あれ・・・ミソラちゃんベイサイドシティに行かないの?」

「マンション壊れたし・・・」

「じゃあ、どこ住むの?」

といふと急に、ミソラは笑顔になつて

ついで、ひっくりするから

「なんだろ？」

ソトコト引張られて進むとたんたんスバルの家が近くへく

「モモカニ」

スバルの脳内はある一一の考え方へ・・・

かわの家

「ええええええつつつつ...-.-.-.ほんと?」

「ほんとだよ ビルが爆発してから居させてもらひてるよ」

「（まじかいな） そうなの・・・じゃあ入るつか」

「うん」

内心は嬉しいスバルであった

奴は目覚めた・・・（後書き）

変なところで切つてすんません

一回サブタイトル打つてなくてやり直した・・・

疲労困憊だわ

感想待つてます・・・

あと、良い文章のアドバイスも！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4615z/>

流星のロックマン4 ~ ?? mystery ~

2011年12月19日20時56分発行